



# 7回裏



文木 公

暇だった休日にテレビをつけたところ、デイゲームのプロ野球中継をやっていた。そしてこれが面白い。

ちょうど3回の両チームの攻撃が終わったところから見始めたのだが、もう6回の表が終わるところである。そして試合の方も、近所の犬の鳴き声や廃品回収トラックのスピーカー音程度の雑音なら全く気にさせないほどに白熱していた。

ソファにだらりと座り、片手にかりんとうを持ちながらの暇つぶしとしては、最高のものである。

学生時代は運動部に所属していたわけでもなく、体育の時間にやったソフトボールでしか野球との接点はなかった。

野球とソフトボールを同等のものとして扱っている時点で察せられてしまうかもしれないが、俺は野球にあまり関心がなかった。もちろんその体育の授業まで野球のルールを知らず、そこでようやくルールを習得したのだが、その際の、守備にバットを持っていく、ファウルボールを打って二塁まで全力疾走する、などのミスについては目をつぶってもらいたい。

とにかく、野球とは限りなく無縁に近い生活を送ってきた。

.....はずなのであるが、今日のこれである。

野球とはなんと面白いものであるか。

得点は4対3。先攻のチームが一点をリードしている。

理由もなく負けている後攻チームを応援しているが、チャンスは作りながらも、なかなか同点に追いつけないでいた。一回に三点を先制され、その裏に一点を返したものの、二回に再び一点の追加点を許した。そして三回に反撃の二点を奪い取って得点を4対3にした。しかしそれから6回の表までスコアボードには0が並び続けている。

応援しているチームが負けているとはいえチャンスのある試合はやはり面白く、手に汗こそ握らなかったものの、テレビ画面を凝視できるほどの面白味はあった。機会があったらまた野球中継を見てもよとも思った。

6回の裏2アウトでバッターが三振した。近所の犬がまた鳴いた。気にならない。

これから7回の表に入るわけであるが、俺には一つ気がかりなことがあった。

もちろん、応援しているチームがこの試合に勝てるか否かも気にかかっているが、それよりなにより今朝から腹の調子がいまいち良くないのである。

今は比較的安定しているが、いつ大噴火を起こすかわからない。

俺はその点に細心の注意を払いつつかりんとうを啜えながらテレビを見ていた。

「頼むから持ちこたえてくれよ？俺の腹。」

ゲームは進み7回の裏になった。

先攻チームの先発投手は回が始まる時に交代し、マウンドにはリリーフが立っていた。

すると応援している我が後攻チームがそのリリーフをたちまち攻略、ノーアウト1塁3塁のチャ

ンスを作り上げる。

手に汗握るべき展開になってきたではないか。

球場の盛り上がり画面を通してはこちらに伝わってくるようだった。相手投手が額に汗を浮かべて「おいおい頼むからやめてくれ」と今にも言い出しそうな顔をしている。俺は「いいぞ、やっちなえ」と今にも言いたいような顔をしながら腹をさすっていた。

そして、大きく息を吐いたバッターがバッターボックスに立つ。第一球目はストライク。速球がストライクゾーンの内角低めに突き刺さった。すぐさま実況が声をあげる。

その瞬間、来やがった。

大噴火寸前の俺の腹が凄まじい地鳴りを発した。瞬間に俺は野球中継と噴火対策を天秤にかけた。

我が家のトイレは玄関のすぐ隣にあり、廊下のつき当たりにあるこのリビングまでの距離はおおよそ8メートル。ドアの開閉、ズボンを下ろす手間、便座に座るアクション。それと自分の運動神経を考慮しても、合わせて5秒はかかるだろう。この5秒が生死を分けるのだ。決してないがしろにしてはいけない。

しかし未だ判断できずにいた理由は、野球中継を見ていたいからである。

試合の序盤から見守ってきたこのチーム、もはや愛着が湧いている。さらに今は願ってもない大きなチャンス。これは見るべきだ。いや、見なければならぬ。今ここでトイレに行ってしまうとこのチームへの愛着が薄れてしまうような気がした。是非この試合を見ていたい。しかし腹が。

俺はリビングのドアの目の前まで移動し、体はドアの外に、顔はテレビの方に向けて足踏みをした。地鳴りが始まってから約20秒。この期に及んで迷っている時間はないと思われた。

俺が自宅で何をしようとして球場で試合は進む。ピッチャーが投げた第2球目はワンバウンドしてボールとなった。

それを見て俺はついに覚悟を決めた。

「このバッターとの決着はすぐにはつかない！」

全く確証はない。もはや単なる願いである。

そして目の前にあるドアノブを高速で掴みにかかる……

その瞬間、来やがった。

電話の着信音が家中に鳴り響いた。もう悪魔の笑い声にしか聞こえない。

この状況である。無視するのが定石であろう。構っている暇などない。さらば悪魔。

が、ここで一昨日に話した友達の言葉を思い出してしまった。

「明後日に合コンがあるんだけどさー、一人キャンセルが出そうなんだよね？でさ、もしそいつがキャンセルしたらお前が来てもいいよ。あ、可愛い子いるぜー。紹介してやろうか？」

うん、そうだ。確かに言っていた。

「じゃあもしキャンセルが出たらお前に電話するよ。判断がギリギリになるかもしれないから

、すぐに埋め合わせを探さないといけないんだ。もしその電話にお前が出なかったら申し訳ないけど他の人に当たるよ。」

うん、そうだ。そうとも言っていた。

これといった恋愛体験をしてこなかった俺としてはそれはとても美味しい話であり、友達の話に諸手を挙げて承知した。是非参加させてくれと。

ここでの電話を無視することは千載一遇のチャンスを自分で潰すということだ。

確かに今は腹の噴火への対処も重要だ。そちらを取る覚悟もできている。しかしながらその選択が必ずしも後悔しないものであるという保証は全くもってない。というよりかは、この電話を無視したら後悔する、と言い切ってしまって問題ない。

そうして俺は極めて短時間で極めて重要な選択を強いられた。

近所の犬がまた鳴きはじめた。そんなことを気にしている心の余裕はもはやなかった。どう決断を下すか。

いっそのこと全部やってしまうというのはどうだろう。

二兎を追うもの一兎も得ずなどと言うが、俺は三兎を追わんとしている。二兎を追うと一兎も得られないらしいが、三兎を追っても一兎も得られないとは言われていない。むしろ三兎をゲットできる可能性さえある。その可能性に賭けるしかないようだ。

俺は棚の上の受話器を掴み取り、テレビの音量を上げた。ピッチャーが投じた第三球目はボールだったようだが、気に掛ける暇はなかった。テレビを横目にリビングのドアを開けっ放しにして勢いよく廊下に飛び出す。トイレのドアも閉めずに俺は便座に腰かけた。片耳で電話を聞き、片耳で廊下越しのテレビの音を聞くという寸法だ。幸い家には俺一人。この怪奇な状態を咎める者はいない。俺は少しほっとして息をついた。

が、ここで、俺はいくつかの残念な事柄について気づいた。

まず一つ目であるが、トイレに駆け込む際テレビの音量を上げたとはいえ、トイレからリビングまでの距離は遠すぎたようであり、テレビの音が全然聞こえないということである。

二つ目は、電話の内容が、新聞店からの集金についてだったことである。確かによく考えてみれば合コン云々という話題を家の電話でふっかけるわけがない。普通は個人の携帯電話にかけるものである。俺の友達はある程度の常識を持ち合わせているので、携帯電話にかけてくるだろう。なぜ気づかなかったのか。

三つ目は、リビングのテーブルの上に置いてある俺の携帯電話が、電話の着信を告げたことである。恐らくこれがその友達からの電話だろう。しばらくリビングに戻ることはできない。

俺はトイレのドアを静かに閉め、噴火を抑えることに努めた。

近所の犬が鳴いた。よく鳴くやつめ。

## 7回裏

<http://p.booklog.jp/book/84039>

著者・表紙画：文木 公

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/lebiphide/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/84039>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/84039>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ